

ふくしま学力調査
学力の伸びを引き出した学校の
取組事例集

第5号

子どもたちが
どれだけ自分が伸びたかを実感し、
自信を深め、意欲を高め、
さらに学力を伸ばすことを目指して



令和7年12月
福島県教育委員会



目次



自己効力感
学級風土



規範意識
主体的・対話的で深い学び

学力の伸びを引き出した学校の取組事例について

1

取組事例 ～小学校～

- | | | |
|----|--|----|
| 規主 | 二本松市立岳下小学校（小規模校）
「学習基盤づくりを通したすべての子どもが学び出す授業」 | 4 |
| 自主 | 郡山市立明健小学校（中規模校）
「深い学びにつながる主体的な対話の工夫を通して」 | 5 |
| 自 | 棚倉町立棚倉小学校（中規模校）
「児童一人一人がなりたい自分になるために問い続け、学び続ける学級・授業づくり」 | 6 |
| 規 | 喜多方市立堂島小学校（小規模校）
「子どもを主語にした、関わり合い・学び合いの充実」 | 7 |
| 学 | 南会津町立舘岩小学校（小規模校）
「一人一人を大切にした学習環境づくり」 | 8 |
| 自 | 広野町立広野小学校（小規模校）
「自分の思いや考えをすすんで表現できる子どもを育成するために」 | 9 |
| 学 | いわき市立湯本第一小学校（中規模校）
「将来の夢や目標に向かって自ら課題を見だし、自ら考え行動する児童の育成」 | 10 |

取組事例 ～中学校～

- | | | |
|----|---|----|
| 自主 | 伊達市立霊山中学校（小規模校）
「自己効力感を高め自信をもって表現できる生徒を育成するために」 | 11 |
| 自学 | 須賀川市立大東中学校（中規模校）
「生徒を見取る力の深化とジャンプのある授業デザインの工夫」 | 12 |
| 学 | 白河市立白河南中学校（小規模校）
「生徒の『自己マネジメント力』を育むために」 | 13 |
| 規 | 会津若松市立北会津中学校（中規模校）
「生徒の自律心を高めるために、学力向上を支えるために」 | 14 |
| 主 | 南会津町立南会津中学校（小規模校）
「自己理解につながる家庭学習の実践」 | 15 |
| 主 | 南相馬市立鹿島中学校（大規模校）
「授業改善PDCAの確立を目指して」 | 16 |
| 学 | いわき市立植田中学校（大規模校）
「『自分にはこれがある、自分ならこれができる』自己肯定感・自己有用感を育む学校づくり」 | 17 |

学力の伸びを引き出した学校の取組事例について

1 趣旨

ふくしま学力調査において、児童生徒の学力の伸びを引き出した学校の効果的な取組事例をまとめ、県内の小・中・義務教育学校及び特別支援学校と実践事例を共有することにより、どの学校においても児童生徒一人一人の学力を確実に伸ばす教育を推進することを目的としています。

2 掲載校について

小学校第4学年から中学校第2学年(義務教育学校第8学年。以下同じ。)を対象として実施した今年度のふくしま学力調査の結果を基に、小学校第5・6学年及び中学校第2学年のいずれかの学年で児童生徒の学力の伸びが見られた学校を選出しました。この選出された学校の中から、管理職のリーダーシップの下、すべての児童生徒の学力向上に向けて学校全体で取り組んでいる学校(県内7つの域内から小学校・中学校各1校)を掲載しています。

3 学校規模について

【小学校・義務教育学校前期課程】

大規模校・・・19学級以上
中規模校・・・12学級～18学級
小規模校・・・11学級以下

【中学校・義務教育学校後期課程】

大規模校・・・10学級以上
中規模校・・・6学級～9学級
小規模校・・・5学級以下

4 内容について

本事例集では、小学校第5・6学年の児童と中学校第2学年の生徒の学力の伸びに着目し、管理職のリーダーシップの下、学校全体で学力向上に取り組んでいる学校の取組事例について紹介しています。

取組事例については、学力と相関関係があると考えられる「自己効力感」、また自己効力感と相関関係があると考えられる「規範意識」「学級風土」「主体的・対話的で深い学び」の合わせて4つの視点について聞き取りを行い、効果が見られたと考えられる取組についてまとめています。

(1) 4つの視点から見た学校の取組について

ふくしま学力調査分析協力者の宮城教育大学教職大学院田端健人教授の御助言の下、非認知能力を踏まえた学力の伸びに注目しています。

令和7年度ふくしま学力調査報告書 特別寄稿より(一部抜粋)

「学力の伸びを引き出した学校の取組事例集」は今年度第5号を迎えます。この取組事例集にも、ふくしま学力調査導入後の福島県の学力向上方針の進展が現れています。特に令和6年度は、さがわりしました。「自己効力感」「学級風土」「規範意識」「主体的・対話的で深い学び」の4カテゴリーに焦点を絞り、授業風景等の写真も掲載されるようになりました。「安心」や「認め合い」や「対話」といったキーワードが躍動しています。写真でも児童生徒が机を寄せ合い、考えを伝え合う様子が多く見られます。全県あげてのこうした取組が実を結び始めたのではないのでしょうか。

学力向上、それと両輪をなす非認知能力向上の一丁目一番地は、学校や学級や家庭の「安心安全」にあります。人間関係トラブルやいじめや虐待のある環境では子どもは委縮し、すくすく伸びることなどできません。安心安全が損なわれ、生徒指導案件に追われるなら、学力向上どころではありません。家族や教師や仲間たちから大切にされ、認め合う環境で初めて、子どもは自分の底力を開放・発揮できます。家庭を変えることはできませんが、学校・学級環境なら教師たちの努力で変えることができます。間違っても失敗しても大丈夫という信頼感があってこそ、挑戦や冒険もできます。教師が一方的に教え込む授業(トーク&チョークの授業)から、子どもたち主体の授業への変革。子どもたちが間違えることを恥ずかしいと思わず、安心してたくさん間違い、それを共有し、どうして間違ったかを対話・探究できる学習環境。教師があえて間違えて、子どもたちに正してもらいたいのも良いでしょう。このようなアプローチが学力向上には近道であることを、福島県が証明しようとしているように私には見えます。

令和6年度ふくしま学力調査報告書 特別寄稿より(一部抜粋)

1 学力と非認知能力の相関の有無

- ・ ふくしま学力調査では、非認知能力に関して、5種類を質問しています。「自制心」「自己効力感」「勤勉性」「やりぬく力」「向社会性※」です。
- ・ 気になるのは、これら非認知能力が、国語や算数・数学の学力値と相関関係にあるか否かです。令和5年度のふくしま学力調査結果から、「自己効力感」だけ、学力と相関があり、他の非認知能力は相関なしでした。
- ・ 学力と自己効力感との相関は、国語よりも算数・数学の方が高く、学年が上がるにつれ、算数・数学との相関係数が大きくなっていることもわかります。

2 「勉学での自己効力感」

- ・ ふくしま学力調査の「自己効力感」は、勉学に焦点化した自己効力感ですから、「勉学での自己効力感」と受け止めるのがよいでしょう。
- ・ 「勉学での自己効力感」スコアは学力値と一定の相関があり、その他の一般的な非認知能力スコアは、学力値とは独立である、とご理解ください。
- ・ 相関関係がなくても、それぞれの非認知能力が一定程度高いことは望ましいことです。

3 「主体的・対話的で深い学び」と「学級風土」の重要性

- ・ ふくしま学力調査結果からは、「主体的・対話的で深い学び」と「学級風土」の合成変数をつくることもできます。これら2つの合成変数は、5つの非認知能力と相関することがわかりました。
- ・ 「数学での主体的・対話的で深い学び」は、「勉学での自己効力感」「規範意識」「学級風土」と中程度の相関(いずれも $r=0.52$)があり、「自制心」と弱い相関($r=0.29$)がありました。
- ・ 数学の授業で主体的・対話的で深い学びをしている生徒ほど、「勉学での自己効力感」や「規範意識」が高い傾向にあり、「学級風土」もよいと感じる傾向にあります。
- ・ 「学級風土」は、「規範意識」と中程度($r=0.43$)、「勉学での自己効力感」や「自制心」と弱い相関がありました。(順に $r=0.33$ と 0.27)
- ・ 「主体的・対話的で深い学び」に積極的に取り組み、お互いを認め合う学級風土をつくりあげることで、児童生徒の非認知能力が高まる」という仮説を支持するエビデンス(証拠)です。どうすれば非認知能力を伸ばすことができるか、を考え実践するためのヒントにもなります。

※令和7年度は調査していません。

(2) 内容の詳細について

各学校の取組事例については、以下のような紙面構成により内容を掲載しています。

4つの視点(自己効力感、規範意識、学級風土、主体的・対話的で深い学び)のうち、どの視点を特に意識した取組であるかを示しています。

規範意識

喜多方市立堂島小学校(小規模校)

「子どもを主語にした、関わり合い・学び合いの充実」



横本校長先生

対話的に学び合う子どもの育成を掲げ、全職員一丸となって取り組んでいます。校内研究も3年目になり、現在、日常の授業でも話し合っ
て解決する姿が当たり前の光景です。同時にあいさつや礼儀等の凡事
徹底により、心を耕すことも学力向上の土台と考え、教育活動全体で堂
島っ子を育成しています。

特に本校で学力の伸びが見られた
児童の割合(R7年度6学年算数科)

88%

県平均: 75.3%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

- 語彙量が増加している。学校全体としてけじめのある生活を送ることができている
- ▲長文に対する苦手意識が見られ、問題場面を正確にイメージすることに課題がある
- 自己肯定感の醸成と、学び合う集団づくりにより、学習に粘り強く取り組んで欲しい

実践1

実践2

今年度のふくしま学力調査における児童生徒の伸びについて、特に伸びが著しい学年及び教科について、伸びが見られた児童生徒の割合を記載しています。

	実践1	実践2
取組内容	規範意識の向上・学び合う集団づくり	学力向上に向けた取組
取組の実態	①自己肯定感を高めるための取組 ・縦割り清掃や総合的な学習の時間の一環として行っている農業科では、異学年で活動した。高学年をモデルにすることで、よさを伝統にしてきた。 ・委員会活動の一環として、子ども同士で見つけた一人一人の「よさ」を全校で共有する活動を行った。お互いの「よさ」に気付くことで自己肯定感の向上を図った。  ②学び合う集団づくりに向けて ・学級力アンケートを年に3回全学年で実施した。レーダーチャートを活用することにより、学級の実態を可視化し、よりよく行動していこうという意識を向上させた。 ・全校で一貫した指導を行ってきた。全教職員が全校児童の担任であるという意識で指導に当たった。1人の学級担任に任せのではなく、よいことも悪いことも見逃さず、その場での指導に責任をもつことを心がけた。	①学習の定着・評価・振り返り ・基礎的・基本的な事項の定着を図るため、テスト・家庭学習のドリル・プリント等で誤答だった箇所については、必ず解き直しを実施した。分からないまませず、友達や教師に確認させ、理解するまで、個別指導を行った。 ・週末に全学年で実態に即した条件作課題に設定した。毎回添削を行い、することにより、自己の伸び、学習の有化を図った。 ②現職教育の充実 ・子どもの姿を基にした研修を実施した。子どもの具体的な反応や思考のつまずきを見取り、次に生かしてきた。 ・協働的な学びの充実に向け、自然に学び合いが始まる課題設定を意識した。思考を深める問い返し、思考をつなぐ言葉かけ、他者を尊重した授業コーディネートをやってきた。 
成果	○実践1の取組を通して、学校全体として親和的な集団が形成されることとなった。「分からない」と言える心理的安全性が確保され、学習意欲につながることができた。 ○実践2の一つ一つの取組が、児童の学力の伸びや自己肯定感の醸成につながった。率先垂範する教師の姿も「教育環境」として機能した。	

学校全体でどのような思いをもって実践にあたっているかを記載しています。

実践の成果を記載しています。

二本松市立岳下小学校(小規模校)

「学習基盤づくりを通したすべての子どもが学び出す授業」



石川校長先生

昨年度のふくしま学力調査の結果、本校では「文章の内容をとらえ、自分の考えがより伝わるよう、表現する」「題意を理解し、答えを求める」「約束や決まりを守る」ことが課題として見つかりました。そのため、全職員が一体となって実践する内容を策定し取り組むことで、自ら学ぶ子どもを育み、学力の向上へつなげていきたいと考えました。

特に本校で学力の伸びが見られた児童の割合(R7年度6学年算数科)

87%

県平均 72%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

○学力上位層は安定して伸びている。

▲学力下位層が伸びていない。

→校内研修における授業改善への取組を充実させることで、「自ら学ぶ子ども」を目指していきたい。
さらに、学習の基盤となる態度などの面でも指導し、学力の向上に繋げていきたい。

実践1

取組内容

自ら問いをもち
問いを自分事として捉える工夫

取組の実際

①校内の研修体制の充実

・「なぜ、〇〇なのだろう」「どうすれば、〇〇ができるだろう」と考えることを児童が問いをもつ姿と定義した。その姿を具現化するために全ての教師が授業レシピーシートを活用して、児童の反応を予想しながら、児童が問いをもつに至るまでの教師と児童のやり取りを計画して研究授業を行った。

②問いを引き出す工夫

・児童にとって身近な場面や話題から教材を作成した。さらに、既習事項とのズレや予測とのズレ、友達の考えとのズレを可視化することで児童の問いを引き出し、学習課題を設定した。

③問いを自分事として捉えるための工夫

・既習事項のつまづきを解決したり、既習事項を活用したりしながら課題解決の見通しをもつことができるようにすることで、解決に向けて自分が追究する意欲を高めた。

実践2

学習基盤づくりの工夫

①学習用具・授業準備の指導

・生徒指導が学力向上に強く影響を与えることを全職員で共通理解を図り、毎日の学習用具を準備して登校したり、授業の開始時に学習用具を揃えたりできるよう約束を設け、各教科、学級で指導を継続した。

②「話し方」「聴き方」の指導

・「やさしい話し方」

「あたたかな聴き方」の定着を目指し、学校独自のステップシートを活用した定期的な評価によって児童のコミュニケーション能力の育成をよりきめ細かく行った。

③あいさつの指導

・「いつでも・誰でも・

自分から」を合言葉に進んであいさつすることを指導し、行動できた児童を認め校内で紹介した。管理職は日常的に校内の様子を見ながら指導の状況や効果を把握し、指導の改善に努めた。

STEP	聴き方	1年	2年	3年	4年	5年	6年
10	課題に沿った話し合いができているのか考えながら聴く					★	★
9	聴いた内容について考えを深めるための質問等を適切に返答する					★	★
8	聴いた内容について相談する				★	★	★
7	聴きやすい場所に移動して聴く			★	★	★	★
6	話し手の言いたいことを分かってもらうように聴く			★	★	★	★
5	自分の考えと比べながら聴く			★	★	★	★
4	友だちの考えを復唱できるように聴く		★	★	★	★	★
3	うなずいたりつぶやいたりしながら聴く	★	★	★	★	★	★
2	人の話を最後まで聴く	★	★	★	★	★	★
1	話す人の方を見て聴く	★	★	★	★	★	★

成果

実践1を通して、学習内容の習熟の程度にとらわれず自ら問いをもつ児童が増えた。また、授業づくりに対する教員の意識が高まり、集団で協働的に研修を進めていく姿が多く見られた。

実践2を通して、コミュニケーション能力の高まりとともに児童の学びに対する態度がより主体的になり協働的な学習が充実した。また、学力下位層に関わる様子が多く見られるようになった。

郡山市立明健小学校(中規模校)

「深い学びにつながる主体的な対話の工夫を通して」



高宮校長先生

昨年度のふくしま学力調査の結果、本校は国語・算数ともに県平均を上回る結果でした。しかしながら、国語科では、語彙力や「読むこと」に課題がありました。また、相手に分かりやすく記述することも課題に挙げられます。算数科では、答えを求めるまでの過程や考え方を筋道立てて説明したり、記述したりすることに課題があり、これらの課題を改善していくためには、児童にどのような資質・能力を育成していくかを明確にし、授業改善を図っていくことが必要であると考えました。

特に本校で学力の伸びが見られた児童の割合(R7年度5学年算数科)

86%

県平均 70%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

○中位層の上～上位層に位置する児童が半数以上いる。

▲学力下位層3割の児童を底上げする必要がある。

→日々の授業で、導入時の「教材との対話」、展開時の問題解決へ向けた「友達との対話」、振り返りの時間を通した「自分との対話」の3つの対話場面を意識し、日々の指導の工夫改善を図っている。

実践1

実践2

取組内容

既習事項の振り返りを大切にした実践
～宿題の活用・復習タイム～

主体的に学ぶための学習環境の工夫
～学年自主学习コーナー・学習形態～

取組の実際

- 現学年の学びとともに、既習事項の復習が効率的に実践できるように、宿題の工夫を行った。プリントの裏に前学年の学習内容をつけることによって、どの児童にも学び直しの機会を確保した。
- 毎日の授業に、既習事項の振り返りをする時間を確保した。前時とのつながりを児童が意識するだけでなく、学習の足跡としても活用した。
- 学習内容が難しくなる高学年にとって既習事項の振り返りをいつ、どこで確保すればよいのかについては、これからも改善の余地があると考えられる。



学び直しが今日の授業を深い学びへとつないでいる!

- 児童が自分に合った学習を選択できるように、学年の廊下に自主学习コーナーを作り、誰でも参考にできるようにした。「真似る」から始まる学びを挑戦できるようになった。

漢字テスト合格に向けて、自分はどうな学習をすればよいだろう?



- 学習形態も3人組にしたり、グループにしたり、様々な方法を取り入れている。児童同士のコミュニケーションを大切にし、話し合いながら課題解決できるように試行錯誤している。



成果

これらの実践により、今年度の学力調査の伸び率は3.2となり、特に下位児の伸びが国語・算数ともによくなっていた。また、質問紙の結果から、本校の児童は自己効力感が高く、学習に対しても積極的であることが分かった。このよさを生かした学びは学力の結果だけでなく、学級経営にもつながっていった。児童の実態を把握して、児童自身が「学ぶことが楽しい」と学びに対して肯定的に向き合えるように、これからも日々の授業を充実させていきたい。

喜多方市立堂島小学校(小規模校) 「子どもを主語にした、関わり合い・学び合いの充実」



橋本校長先生

対話的に学び合う子どもの育成を掲げ、全職員一丸となって取り組んでいます。校内研究も3年目になり、現在、日常の授業でも話し合っ
て解決する姿が当たり前の光景です。同時にあいさつや礼儀等の凡事
徹底により、心を耕すことも学力向上の土台と考え、教育活動全体で堂
島っ子を育成しています。

特に本校で学力の伸びが見られた
児童の割合(R7年度6学年算数科)

88%

県平均 72%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

○語彙量が増加している。学校全体としてけじめのある生活を送ることができている。

▲長文に対する苦手意識が見られ、問題場面を正確にイメージすることに課題がある。

→自己肯定感の醸成と、学び合う集団づくりにより、学習に粘り強く取り組んで欲しい。

	実践1	実践2
取組内容	規範意識の向上・学び合う集団づくり	学力向上に向けた取組
取組の実際	①自己肯定感を高めるための取組 - 縦割り清掃や総合的な学習の時間の一環として行っている農業科では、異学年で活動した。高学年をモデルにすることで、よさを伝統にしてきた。 - 委員会活動の一環として、子ども同士で見つけた一人一人の「よさ」を全校で共有する活動を行った。お互いの「よさ」に気付くことで自己肯定感の向上を図った。  ②学び合う集団づくりに向けて - 学級力アンケートを年に3回全学年で実施した。レーダーチャートを活用することにより、学級の実態を可視化し、よりよく行動していこうという意識を向上させた。 - 全校で一貫した指導を行ってきた。全教職員が全校児童の担任であるという意識で指導に当たった。1人の学級担任に任せるのではなく、よいことも悪いことも見逃さず、その場での指導に責任をもつことを心がけた。	①学習の定着・評価・振り返り - 基礎的・基本的な事項の定着を図るため、テスト・家庭学習のドリル・プリント等で誤答だった箇所については、必ず解き直しを実施した。分からないままにせず、友達や教師に確認させ、理解できるまで、個別指導を行った。 - 週末に全学年で実態に即した条件作文を課題に設定した。毎回添削を行い、掲示することにより、自己の伸び、学びの共有化を図った。 ②現職教育の充実 - 子どもの姿を基にした研修を実施した。子どもの具体的な反応や思考のつまづきを見取り、次に生かしてきた。 - 協働的な学びの充実に向け、自然に学び合いが始まる課題設定を意識した。思考を深める問い返し、思考をつなぐ言葉かけ、他者を尊重した授業コーディネートを行ってきた。 
成果	実践1の取組を通して、学校全体として親和的な集団が形成されることとなった。「分らない」と言える心理的安全性が確保され、学習意欲につなげることができた。 実践2の一つ一つの取組が、児童の学力の伸びや自己肯定感の醸成につながった。率先垂範する教師の姿も「教育環境」として機能した。	

南会津町立舘岩小学校(小規模校)

「一人一人を大切にした学習環境づくり」



菊池校長先生

全校児童数26名の本校では、一人一人にじっくりと目を向けて、実態に応じたきめの細かい指導をすることが可能です。また、複式学級での学びの中で、安心して対話できる関係づくりに努めていたことによって、子供たちの間に助け合って取り組もうとする意識が醸成されたことも、学力を伸ばした要因の一つであると考えています。

特に本校で学力の伸びが見られた児童の割合(R7年度5学年国語科)

83%

県平均 67%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

- 質問紙の回答から、安全・安心にかかわる設問への肯定的な回答の割合が多い学年は正答率が高いことがわかった。
- 親和的な集団づくりと一人一人の実態に寄り添った授業づくりによって、安心して学ぶことのできる環境を提供する。

	実践1	実践2
取組内容	親和的な集団づくり	一人一人の実態に寄り添った授業づくり
取組の実際	①教師との信頼関係 ・休み時間や給食の際には、児童一人一人の話に耳を傾けて、会話を楽しむ時間を大切にしている。日頃から、子供たちの思いや願いに共感することで、相互理解を深めてきた。日々の小さなコミュニケーションの積み重ねが、授業における教師と児童の対話の充実につながっていると考えている。  ②多面的な実態把握 ・年に2回のQ-Uテストを丁寧に分析し、学校全体で共有することによって児童一人一人の実態を多面的に捉え、居場所のある学校づくり・学級づくりにつなげている。	①対話力の育成 ・幼稚園から中学校まで同じ集団での学びが続くため、授業の中でも単語だけの「以心伝心」の対話になりがちな実態がある。授業では、自分の考えをはっきり「書く」「説明する」を徹底することで、学校全体で対話力の向上を目指してきた。  ②多面的な実態把握 ・昨年度は、学力向上支援アドバイザーに授業についての助言に加えて学力調査の分析にも取り組んでいただいた。分析から明らかになった一人一人の実態を日々の授業づくりに反映してきた。
成果	5・6年生ともに、国語科でも算数科でも85%以上の児童の学力が伸び、無回答率も下がった。両学年とも入学時から複式学級での指導を受けているため、間接指導においても「全員で進む」という意識をもっていること、また、「取り残されない」ように分からなければ遠慮せずに自分から手を挙げて、友だちや先生に質問する習慣を一人一人がもっていることが、学力の伸びにつながった要因であると考えている。	

広野町立広野小学校(小規模校)

「自分の思いや考えをすすんで表現できる子どもを育成するために」



奥山校長先生

昨年度の現職教育アンケートの結果から、本校では「自分の思いをもつ」ことに肯定的な回答を示した子どもが減少していることが分かりました。そこで、昨年度の「学び合い」というキーワードに「自分の思い」を加えて、全職員が一体となって必要な内容を策定し、共通実践に取り組んできました。

特に本校で学力の伸びが見られた児童の割合(R7年度5学年国語科)



【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

○全体的に学力が伸びている。

▲学力中位層の伸びが思わしくない。

→「学びの変革」授業デザインにおける「学び合う」段階を重視し、学力中位層の子どもを中心に「自分の思いや考え」をもつことができるように、組織的・計画的に授業改善に取り組む。

	実践1	実践2
取組内容	学校の組織力を最大限に生かした授業改善	両輪の関係になっている学級経営と教科指導
取組の実際	①エビデンスに基づいた効果的な称賛 - 各種学力調査の質問紙調査や教師の見取りを通して子ども一人一人のよさを把握し、「褒めて伸ばす」ことを継続実践してきた。 ②教師による意欲的な自己の学びの追究 - 現職教育の共通理解事項である教師のコーディネートを支えながらも、授業者がやってみたいことや思い付いたことを尊重し「まずは、やってみよう！」を合言葉に、授業実践を積み重ねてきた。研究授業実践後、授業者は実践レポートを作成し、学習コーナーや廊下等に掲示した。掲示されている実践レポートは、教師だけではなく子どもたちにとっても学びの履歴となっている。教師と子どもそれぞれの学びが互恵的であり、新たな学びにつながっている。 	①各教科での「書く」活動を通した振り返り - 現職教育の「自分の思い」「学び合い」というキーワードに基づいて、授業の中で自分の考えや思いを書く時間を確保してきた。どうしても書けない子どもには他者参照を認め、納得感を大切に指導を展開した。他方、一定の理解を示した子どもについては相手を説得することを大切に、自分の思いや考えを伝えようとする意識を高めるための働きかけを行った。また、各教科において自分の考えや思いを書く活動をとおして振り返ること、活躍の場の設定や育成すべき資質・能力の見直しにつなげている。 ②身に付けた資質・能力の視覚化 - 形成的・総括的評価や目標達成に関するアンケートの結果などをグラフ化し、達成度を視覚的に捉えやすいようにしたことで、子ども自身が資質・能力の高まりを実感できるようになった。 
成果	学力中位層を中心に一定の伸びが見られた。「主体的・対話的で深い学び」の実施に関する数値が0.4ポイント上昇した。また、6年生については自己効力感やプランニング方略、努力調整方略の数値が0.1～0.2上昇した。教師自身も学びの連続性を意識し、授業改善に取り組むようになってきている。	

いわき市立湯本第一小学校(中規模校) 「将来の夢や目標に向かって自ら課題を見だし、 自ら考え行動する児童の育成」



大石校長先生

昨年度のふくしま学力調査の結果、児童質問紙「将来の夢や目標をもっていますか」の項目において、県平均より低い実態がありました。そこで、本校では日々の教育活動を充実し、児童に「夢や目標」をもたせることで、自己有用感や学習意欲の向上、失敗への対処の仕方等の力を育み、児童一人一人が主体的に学びに向かうことができる授業づくりに努めました。

特に本校で学力の伸びが見られた児童の割合(R7年度5学年国語科)

78%

県平均 67%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

○学力上位層の伸びが著しい。

▲学力中位層の伸びが思わしくない。

- 児童の学習環境「学びの土台」づくりをすることで、教職員にとっても児童にとっても学習に向かう心と体の準備を行うようにする。
- 探究活動や体験活動を充実させることで、児童が自ら課題を見だし、自ら考え行動することができるようにする。

	実践1	実践2
取組内容	児童の学習環境「学びの土台」づくり	地域の「ひと・もの・こと」に積極的に関わる探究活動の充実
取組の実際	○重点項目の精選 重点項目を3点に絞り、「学びの土台」として見える化・言語化した。 (1)相手の目を見て話を聞く。 (2)休み時間中に学習用具を準備し、チャイムと同時に授業を始める。 (3)正しい姿勢で学習を行う。 ↓ ㊦んな時でも目を見てきこう ㊦いじなのは次への準備 ㊦いしせいで取り組もう 月に1回、朝の放送で呼びかけ、振り返りを行った。放送内容は「学びの土台をつくるよさ、必要性」「児童の変容した姿」「先生からの価値付け」「振り返る視点」とし、学校全体で同一步調で児童を指導できるようにした。	○総合的な学習の時間の充実 地域サッカーチームと出会い、「いわきのために」「復興のために」という思いを感じた子どもたち。自分たちも地域のためにできることはないかと動き出した。例えば、地域にある温泉宿を訪れインタビュー活動を重ねた子どもたちは「もっと温泉宿の魅力を伝えたい」と考え、どのような方法があるのか、その方法で喜んでもらえるのかを話し合い「涼んでもらうためのオリジナルうちわを作りたい」「湯本温泉の入浴剤を作りたい」などの考えが出された。最後には、地域の魅力や自慢、うちわや入浴剤を作ったことなどについて家庭や温泉宿に向けた発表会を行った。 
成果	「学びの土台」は、分かりやすく、言葉にしやすいワードであったため、無理なく浸透していった。また、教職員が同じ目線で指導をする姿が児童には効果的であったようで、児童の行動や意識に多くの変化が見られた。 地域の「ひと・もの・こと」に多く関わる経験を通して、児童が学びを自分事として捉え、自ら課題を見いだしたり、自ら考え行動したりできるようになった。	

伊達市立霊山中学校(小規模校)

「自己効力感を高め自信をもって表現できる生徒を育成するために」



斉藤校長先生

学習指導と生徒指導は表裏一体。どんなに素晴らしい学習指導をしても、生徒と教師の信頼関係がないところに学力向上はありません。個々の学習状況はもちろん、生徒の心の状態や生活態度を全職員で積極的に見つめ、関わることで、安心して学習できる環境づくりを、全職員で推進しています！

特に本校で学力の伸びが見られた生徒の割合(R7年度2学年数学科)

86%

県平均 72%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

○学力中間層、下位層の伸びが上位層の伸びよりも顕著であった。

▲規律ある態度についての調査では「話を聞き発表する」ことに課題があった。

→自分で考える力や相手を尊重しながら自分の考えを表現する力を高めるため、全職員で授業改善を図った。

	実践1	実践2
取組内容	継続的な改善サイクルを実現する 研修体制を通じた授業づくり	積極的な生徒理解とプロセス評価
取組の実際	①学び続ける教師を支える研修体制 ・「主体的に学び、確かな学力を身に付けた生徒」の育成を目指し、4月段階の生徒の実態を分析し、授業で行う手立てについて全教師で協議した。7月の要請訪問に検証授業(1)を全教師が行い、手立ての検証を行った。検証授業(1)の指導助言を基にした検証授業(2)を9月～11月に全教師が行い、指導助言を反映した手立ての更なる検証を行った。さらに、中学校区及び隣接区にも授業を公開して授業に対する意見を広く求め、教師が目指す生徒像の具現化に向けて学び続けることができた。 ②表現力の育成と深い学びの実現 ・全教科において、表現力を育成するための言語活動を具体的に設定し、深い学びを実感させる振り返りを継続的に実践した。 ○グラフでは表に書いていない値を自分で求めて、表裏とが一致した。式では、自分で答えを出せることができた。いろいろなことを考え、理解が深まった。 ○式や物で実際に解いてみて、グラフは目視で検測でき、式はより正確な計算ができることと体験できることができた。⑤ 目標に応じて使い分けられるよう練習したい。	①積極的な生徒理解 ・1人1台端末を活用して、毎朝「心と体の健康観察」を行い、生徒は複数の質問に4件法で回答した。低い数値を入力した生徒に対して、管理職、学年教師、学級担任、養護教諭、特別支援コーディネーター等が積極的に声をかけ、その日のうちに当該生徒との対話を通じた実態把握を行い、必要に応じて組織的に対応できるようにした。 ②全職員によるプロセス評価 ・学校生活で見られた生徒の意欲やよい姿勢、望ましい行動や発言などを教職員同士が職員室で報告し合うようにした。その情報を基にして生徒を意図的に称賛し、成果につながる適切な行動を促した。褒められた言動を繰り返したり、新たに努力したりする生徒が少しずつ見られるようになり、自己効力感の向上につながった。
成果	ペアやグループによる活動で、相手意識をもって自分の言葉で分かりやすく表現する生徒が増加した。また、目標達成に向けて主体的に行動できる生徒が増加した。日頃の細かな情報交換や、前向きな称賛が当たり前になったことで、生徒一人一人の力を信じて、それを引き出そうとする教師集団をつくり上げることに結びついた。	

須賀川市立大東中学校(中規模校)

「生徒を見取る力の深化とジャンプのある授業デザインの工夫」



安齋校長先生

本校では全教職員が一人一人の生徒の成長を見守り、保護者や地域の方々のご理解とご協力をいただきながら学校運営をすすめています。また、大東地区には三校一園(一こども園、二小学校、一中学校)連携の授業研究会・分科協議会・PTA連絡協議会等があり、地区で子どもたちを育てる基盤があります。良好な人と人との関係性が今回の結果にも繋がっていると感じています。生徒のよさをいかし、取組を深めながら、子どもの力を伸ばしていきたいと考えています。

特に本校で学力の伸びが見られた生徒の割合(R7年度2学年数学科)

100%

県平均 72%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

○国語、数学ともにどの層も向上していた。

▲中間層の伸びが他の層の伸びと比べると低い。

→校内研修における「ジャンプのある授業デザインの工夫」を継続していく。

教師が生徒の学びを見取る力をさらに向上させることで、すべての生徒の学びがそれぞれに深まっていくように工夫する。

実践1

実践2

取組内容

日々の授業におけるジャンプのある授業デザインの工夫

授業研究会による「学びを見取る力」の深化
学校教育アドバイザーによる研修

取組の実際

○日々の授業における授業研究

- ・「ジャンプのある学び(教科書以上のレベル)」の課題で授業をデザインすることとした。
- ・1つの班を3・4人の男女市松模様で構成し、班の形態で1日を過ごすようにしてきた。
- ・班で学習に取り組む「聴き合う関係」を基にジャンプの課題に取り組むことにより、「子ども同士の学び合い」を生み、周りを見て、尋ね、対話できるようにした。この学習環境を生み出すことで、生徒が一人残らず50分間質の高い学びができる授業となってきた。



○授業研究会

- ・令和7年度は全16回の授業研究会を実施するなど、一人2回以上授業研究会をもった。
- ・授業研究会は、参観者の「子どもの学びを見取る力を伸ばす日」とし、全員で参観を行った。
- ・授業研究会では指導案等は作成せず、座席表、生徒に配付する教材等のみ準備するようにするなど、日常の授業による授業研究会を実施した。
- ・子どもの姿から学び事後研究会を実施した。子どもの姿を全員で見取り、どのような学びが展開されていたかなどを話し合った。



○学校教育アドバイザーによる研修

- ・年に2回学校教育アドバイザーから現職研究へのアドバイスをいただいた。

成果

生徒質問調査の結果では「分からないことなどを質問しやすい雰囲気授業が行われたこと」で「よくあった」と答えた割合が、R6年度1年 35.5→R7年度2年 62.1、「課題の解決に向けて、話し合ったり交流したりしたことで、自分の考えをしっかりともてるようになったこと」で「よくあった」と答えた割合が、R6年度1年 45.2→R7年度2年 62.1 と大きく向上している。このように周囲と聴き合う関係が構築されたことで、一人一人が学習に取り組みやすい環境となり、学びに向かう姿勢が向上したと思われる。

白河市立白河南中学校(小規模校) 「生徒の『自己マネジメント力』を育むために」



小野校長先生
(生徒画)

「誰一人取り残さない！」を合い言葉に、一人一人の困り感に全教職員が継続的に対応することで、生徒は見通しをもち、課題に取り組むことができます。また、「みる」「きく」「つなぐ」ことを意識し、間違いが許される温かな雰囲気の中で授業が展開されていることも、成果につながっていると考えます。

特に本校で学力の伸びが見られた生徒の割合(R7年度2学年数学科)

81%

県平均 72%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

- 「授業の始めに、学習の見通しをもって授業に取り組んだこと」や「授業の終わりに、学んだことを振り返り、分かったことや分からなかったことを自覚したこと」が「よくあった」と回答した生徒は学力レベルが高い傾向にある。
- ▲学年が上がるにつれて見通しをもって授業に取り組んだり、学習した内容を振り返ったりする生徒が減少傾向にある。
- 自己実現に向けて自ら「R-PDCA サイクル」を回し「自己マネジメント力」を身に付けた生徒の育成を図る必要がある。

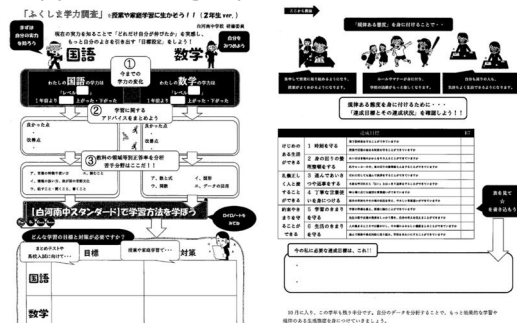
実践1

取組内容

生徒自らがR-PDCAサイクルを回せる自己マネジメント力を育成する。
【(R)自分の課題を見付け(P)目標や計画を立てる(D)計画に沿って学習する(C)学習を振り返り、確かめる(A)学習を見直し、修正する。】

取組の実際

○生徒が「ふくしま学力調査」の結果を自ら分析し、学力の状況を把握させるとともに、「どれだけ自分が成長したか」を実感させ、自分のよさをさらに伸ばすことができるよう、分析や対策を記入するシート(下部参照)を活用し、目標を設定させた。さらに、三者面談において、今後の方向性を保護者と共有するなど、家庭との連携も深めてきた。このような取組を通して、生徒は自分の学習方法を日々見直し、改善する力を身に付けている。



実践2

全職員の「生徒に寄り添い、認め、励まし、ほめ、伸ばす」関わりと共通実践を通じた学級・学校風土の向上を図る。

○教職員は「生徒に寄り添い、認め、励まし、ほめ、伸ばす」指導を共通実践している。そのため、生徒は分からないことがあると、授業中や授業後、放課後等に積極的に教員へ質問するようになっている。また、教職員はQ-Uテストを活用した学級づくりの研修を行い、分析を基に担任と全教職員が連携して学級経営を充実させている。さらに、全教職員で生徒一人一人を丁寧に見取り、よさを積極的に称賛したり、毎月の生徒アンケートで問題をもつ生徒を確認することはもちろん友達によさを聞き取り、生徒同士のよりよい人間関係の醸成を促したりするなどのプロアクティブな生徒指導(特に発達支持的生徒指導)を進めることで、学力の向上にもつながっている。



成果

全教職員の共通実践を基盤に、生徒が「白河南中に来てよかった」と感じられる学級風土、学校風土づくりが進められている。また、生徒自身が自分を見つめ、なりたい自分を目指し十分に力を発揮できるよう、様々な支援を継続することで、「自己マネジメント力」の向上がみられてきた。その成果が各種学力調査等の結果にもつながっている。

会津若松市立北会津中学校(中規模校)

「生徒の自律心を高めるために、学力向上を支えるために」



高橋校長先生
(生徒画)

本校では組織的な取組を基盤として、生徒一人一人の現状を把握して「一年かけて身に付けさせたい力を明確にして実践しよう」と進めています。自分で考え、行動し、達成感を体験させることを第一として、これからは教職員一丸となって生徒のために実践していきます。

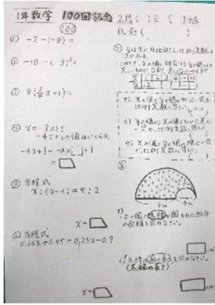
特に本校で学力の伸びが見られた生徒の割合(R7年度2学年数学科)

77%

県平均 72%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

- 学力を着実に伸ばしている生徒が多い。時刻を守って生活できている。
- ▲学力下位層の底上げが必要である。時と場に応じた言葉遣いを身に付けさせたい。
→組織的な対応により生徒の自律心をさらに高めるとともに、TT指導の工夫により個に応じた支援を進め、学力下位層の底上げを図っていきたい。

	実践1	実践2
取組内容	生徒の自律心を高めるために	生徒の学力向上を支えるために (数学科における取組)
取組の実践	①組織的対応と教員の連携 ・「全ての生徒が自分たちの生徒である」という意識をもち、全教職員が共通理解のもと、日々の生活指導を行ってきた。(時間、服装、言葉遣いなど) ・生徒が自発的・主体的に自らを律し高めていくことができるように、学年担当教員から「学年外の先生から聞く褒め言葉が一番うれしい」というアイメッセージを日々生徒に伝えてきた。 ②学校環境の効果的活用 ・学年フロアと教員が常駐する教科研究室を近くに設置し、生徒と教員の物理的距離をなくすことで、生徒が教員に相談できる環境を整備しながら、学習サポートを受けやすくした。 	○TTの戦略的活用とリアルタイム分析 ・数学科の教員間で共通理解を深め、TTの目標を「素早的確な個別指導」と定めるとともに、TTにおけるそれぞれの役割を明確にした。 ・毎時間の授業冒頭で自作の小テスト(レディネステスト)を実施し、その日の学習内容に関連する、生徒一人一人の理解度を確実に把握した。 ・T1が全体指導をしている間に、T2が小テストを採点・分析し、誰がどこでつまづいているのかをリアルタイムで特定した。 ・T2の分析結果に基づき、その日の個別指導の対象と内容を即座に決定し、T2による効果的な個別支援を行った。 
成果	実践1では、生徒と教員の親和的な関係が構築されたことで、生徒の自律心を高めるとともに、授業で分からないことを分からないと表明できる学習文化が醸成された。 実践2では、「全体指導→即時診断→個別支援」というサイクルを毎時間繰り返すことで、学習内容の取りこぼしを防ぎ、学年全体の学力向上を図ることができた。	

南会津町立南会津中学校(小規模校) 「自己理解につながる家庭学習の実践」



植木校長先生

教師が教えるのではなく、生徒から引き出すことを意識した授業が日々展開され、全校生が安心して、落ち着いて学ぶことができています。また、本校では、家庭の協力を得て、授業での学習内容が定着するよう生活・学習習慣の形成にも努めることで、着実に生徒の学力を高めてきました。

特に本校で学力の伸びが見られた生徒の割合(R7年度2学年国語科)



【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

○記述式の設問の回答率は100パーセントだった。

▲生徒質問紙から、家庭での過ごし方に大きな差があることが分かった。

→ 学習内容が定着する生活習慣の形成と授業における対話の機会の充実に努める。

	実践1	実践2
取組内容	家庭学習の充実	対話の量・質を保障する授業
取組の実際	①全校オリエンテーション - 入学後すぐに生徒会役員が全校生に望ましい学習習慣について説明した。また、3年生が1年教室に出向いて、家庭学習の仕方を説明する機会も設けた。これらは2・3年生が自身の学び方を見直す貴重な機会にもなっている。  ②テスト期間前の家庭学習計画作成 - 教育課程に位置付け、テスト期間前に、学級活動の中で家庭学習計画をそれぞれで作成させた。1年生は、3年生からアドバイスを受けながら作成できるようにした。定期テストの度に、前回のテストの反省をもとに新たな学習計画を作成するため、次第に自分に合った学習習慣が確立できた。	①対話の場の設定 - 自分の考えを広げたり深めたりするために、授業の中で対話の機会を多く設けてきた。 - それぞれの思考をより効果的に広げ深めることをねらって、異なる意見をもつ生徒と対話するように、教師が意図的に声をかけるようにした。 ②相手の意見を理解できるまで対話 「言い合い」で終わらせないために、対話の中で必ず「なんで？」と質問させることを積み重ねてきた。対話の充実を目指して「質問力の向上」も意識させることにつながった。このようにして、生徒が「他者の意見に触れることによって、自身の考えがよりよいものに高まった」という実感をもつことができる対話を目指してきた。 
成果	1年生から2年生にかけて、2教科平均約84.5%の生徒が学力を伸ばした。テスト期間前の家庭学習計画の作成と実行、その振り返りのサイクルによって学習習慣が確立し、メディアコントロールも含めた生活習慣の改善と併せて、生徒一人一人が自分に合った正しい努力の仕方を身に付けたためであると考えている。また、対話の量や質を重視した授業づくりが、記述式の無回答率の低さや正答率の高さにつながったものと捉えている。	

南相馬市立鹿島中学校(大規模校) 「授業改善 PDCA の確立を目指して」



高校長先生

昨年度のふくしま学力調査の結果、本校では思考力・表現力の育成に課題があることが分かりました。そこで、思考力・表現力を育成するために県が推奨する施策を重視した上で、全職員が一体となって実践する内容を策定し、共通実践に取り組んできました。

特に本校で学力の伸びが見られた生徒の割合(R7年度2学年数学科)

77%

県平均 72%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

○全体的に学力が大きく伸びている。

▲学力中位層が他の層に比べてあまり伸びていない。「主体性を育てる協働的な学び」への転換が必要。
→「主体的な学び」を生み出す、生徒の気付きや問い・願いを活かした学習課題の設定と学んだことを使う・活用する場面の意図的確保、「学び合い」を実現する授業改善を組織全体で目指す。

	実践 1	実践 2
取組内容	生徒の学びの充実を目指した 教師の授業力の向上	授業改善による「観」のアップデートと 個別最適な学びの推進
取組の実際	①よい授業のイメージづくりを目指す校内研修 - 自由参観形式の互見授業を実施した。タブレット上の共有機能があるアプリケーションを活用し、データ化した授業略案に、参観者が学びや気付き等を付箋で記入し、参観しながら意見交流した。事後研修の簡略化を図るとともに、授業者の振り返りや参観できなかった教師に共有ができる取組となった。 ②公開授業の機会や指導主事招聘等の有効活用 - イノベーション人材育成推進教員による授業公開の機会を活用し、事後協議会の様子をオンラインでつなぎ、参加者以外の職員も自由に視聴する機会を設定した。指導助言者から授業づくりの手立てや視点を学ぶ機会とした。 - R5年度に本校で実施した義務教育課指導主事による算数・数学授業づくり支援訪問での学びを反映させ、向上的変容がみられた生徒への教師の関わりに着目した授業改善を全職員で検証する校内研修を実施した。教師は子どもの事実に基づき分析を行い、生徒への効果的な関わり方について理解を深めた。	①目指す子ども像と取組の方向性の共有 - ワークショップ型の研修を実施し、本校キャッチフレーズ「ひとみ輝く 笑顔あふれる」を実現した子どもの姿を全教職員で共有した。教師が「みる」「きく」「つなぐ」授業改善の必要性を共有し意識改革を目指した。 ②多様性への理解と個別最適な学びの実現 - Q-Uテストの活用(6月と11月実施)により、学びの共同体としての学級づくりを目指す。1回目の実施後、学級単位での分析結果を元に、スクールカウンセラー(SC)を講師にケース会議を実施した。分析結果の見直し・手立てを検討し指導に活かした。また、2回目の結果から変容を確認し、手立ての有効性を検証した。 - 支援の必要な生徒を対象にしたSCによる授業観察を実施。見取りを基に、担当教諭等と授業のUD(ユニバーサルデザイン)を意識した具体的な工夫等を検討する体制を整備した。 - 授業や家庭学習に学習アプリを活用した。動画解説や問題を授業の導入、反転学習等を中心に、生徒が主体的に活用できる環境を整備した。
成果	学力中位層における一定の伸びが見られた。「主体的・対話的で深い学び」の実施に関する数値が0.3ポイント上昇した。また、柔軟的方略と作業方略の数値が0.1ポイント上昇した。教師にとっては、「主体性を育てる協働的な学び」を目指した課題設定の工夫をより強く意識するようになった。	

いわき市立植田中学校(大規模校)

『自分にはこれがある、自分ならこれができる』 自己肯定感・自己有用感を育む学校づくり』



角田校長先生

昨年度のふくしま学力調査の結果、本校では「学力向上・自己有用感・幸福感」を課題として捉えました。そこで、授業や総合的な学習の時間、学級活動等において「発表の機会」(インプットしたことを自分なりにまとめアウトプットする場)を全職員が一体となって取り組み、講義的な一斉画一的な授業から個別最適化された生徒主体の授業へ変革することとしました。

特に本校で学力の伸びが見られた生徒の割合(R7年度2学年数学科)

81%

県平均 72%

【前年度のふくしま学力調査結果の考察から】

○学力上位層の伸びが著しい。

▲学力中位層の伸びが思わしくない。

→ 様々な教育活動において活躍の場、認められる場、充実感を得る場を設定することで、生徒の非認知能力の育成を図る。

→ 校訓である「和敬」や「植中プライド」の育成を基本に、全教師の共通理解のもとで課題を共有し指導を行うことで、落ち着いた学校の雰囲気づくりに努める。

	実践1	実践2
取組内容	夢や希望、将来の展望をもたせる キャリア教育の充実	生徒指導の機能を生かした学習指導
取組の実際	①道徳の時間の充実 ・「希望と勇気、克己と強い意志」を重点価値項目に据えて、対話と考え議論する活動を通して、道徳的価値について自分事として捉え、人間としての生き方について自覚を深める時間を確保した。 ②生徒を伸ばす「ほめ方」の共有 ・令和7年度「校長室だより第1号」で、「ほめ方」について教職員と共有した。 (1) ほめるタイミング (2) 子どもが今までやっていなかった頑張りを見逃さずにほめる (3) 具体的にほめる (4) ほめ方に気持ちがこもっている ほめる場(個人か一斉か)や内容(授業外も積極的に)についても確認した。	生徒指導の機能を生かし、生徒の学びの意識改革を図った。 ①校訓「和敬」 ・人との関わりを大切にし和を尊ぶ中で、安心して学び安心して自分の考えを発表できる雰囲気づくりに努めた。 ②植中プライド ・学習訓練の徹底、ノーチャイムによる休み時間の過ごし方、学習用具の準備、「話す、活動する」など時と場に応じた行動について意識させながら学校生活を送ることで、自立して学んでいける生徒の育成に努めた。 ③アウトプットの機会の確保 ・自分の考えを自由に表現する安心安全な学級風土の醸成に努めた。
成果	生徒の非認知能力の育成を図ったことで、生徒一人一人が学びを自分事として捉えたり、自分の考えを他者に積極的に伝えようとしたりすることができるようになった。 校訓「和敬」や「植中プライド」の育成等をもとにした生徒指導を実践することで、一貫した教育活動を行うことができ、生徒と保護者から信頼を得ることができた。また、落ち着いた学校生活を送ることができた。	